

多き事をいふ也。」とする。妥当な理解であろう。

露の名所である宮城野の木の下の間間に、無数の螢が光を点滅させながら乱舞するさまは、幻想的でさえある。

(夕 蟬)

例なくせみの声もひとつにひゞきゝて松かげすゞし山の滝つせ

〔校異〕なし

(三九六)

「ひとつに」響きくるものは、蟬の鳴き声と山の滝つ瀬の音である。

また、松陰が涼しいのは、一つには日陰になっているから、一つには、滝つ瀬の音からくるものである。聴覚で涼しさを感じるのは、一種の共感的現象である。

じりじり照りつける夏の太陽光線を避けて、松陰に腰をすえ、目を閉じていると、木々のそこから聞えてくる蟬の声と山の滝つ瀬の音が一つになって響びきあってくる。その響きあいを聞きながら、日陰の涼しさを満喫しているところである。

夏 雨

幽をく露の残るも涼しうつ蟬のは山にはるゝむら雨の空(四〇一)

〔校異〕なし

「諺解」は、この歌の本歌として、「源氏物語」(空蟬の巻)の空蟬の羽におく露の木がくれてしのびしのびに濡るゝ袖かなをあげるが、空蟬の羽根に露が置いた点が、たまたま一致しただけで、特に本歌として意識したものではなからう。

むら雨の通り過ぎたあとの露が残っているのは空蟬の羽根である。一首は、山々をひとしきり、むら雨が降り過ぎてゆき、やがてさわやかに晴れたが、空蟬の羽根に残っている雨露をみると、いかにも涼しく感じるといふ感覚世界を詠じている。薄くて透明な蟬の羽根だけに、そこに残る露も一段と涼しく感ぜられるのである。

なお、「うつ蟬のは山に」の「は」には、「蟬の羽」と「端山」をかけてある。

注1. 享保八年刊行の版本に依拠する。

2. 「本居宣長全集」第二卷(筑摩書房)による。

3. 「私家集大成」の本文と歌番号による。他の家集も特に指示しない限り同じ。

4. 友・に關しては、拙稿「友を詠じた西行の歌」(中世文学研究第六号、昭55・8)に触れた。

5. 有吉保著「千五百番歌合の校本とその研究」による。

6. 小西甚一編著「新校六百番歌合」による。

(昭和56年4月10日受理)

ちかきおもひといふも。戀の歌に。人にあかるゝ事を秋くる共秋
近き共いふになぞらへて。かの白氏が詩の詞を以て。螢のうへに
いひなせるなり。實に螢のうへの思ひにはあらず。さて思ひには
さまざまの思ひある中に。秋ちかき思ひを出せるは。かの詩の句
によりて。影ぞみだるゝといふとかけ合せたる物也。一首の意は。
草の葉末の露に螢の影のみだるゝを見て。是や思ふ人の心の秋ち
かきをなげくほたるの思ひならんとよめる也。」と自説を展開す
る。

「玉箒」の中でいう「かの白氏が詩」とは「和漢朗詠集」にあ
る「螢火乱飛秋已近、辰星早没夜初長」をさす。但し、この漢詩
は白楽天のものではなく、「全唐詩」（卷十五）にある元稹の作
である。

要するに、「影ぞみだるゝ」の原因を、秋近くなって、ほとん
く消えるので螢が思い乱れているとする「諺解」の説に対し、
「玉箒」は「秋ちかき」に人に飽きられる意があるとし、葉末の
露に螢の影の乱れるのを見て、わが思う人の心にも飽きがきざし
たと歎じたとする。

しかし、「玉箒」のこの理解は少し穿ち過ぎてはいないだろう
か。例の歌は、おもひ草の葉末に露と同じように乱れる螢火を見
て、これを秋近くなって、螢が思い乱れていることにしてうたっ
たのであろう。

因に、「おもひ草」は女郎花や竜胆の異名ともされるが、実体

は不明。和歌では、

道の邊の尾花がしたの思ひ草今さらになど物か思はむ

（万葉集・卷一〇・二二七〇）

が初めての登場である。ここでは「おもひ草」の「ひ」に螢との
関連で「火」をかけている。

野 螢

御宮城野の木の下やみにとぶはたる露にまさりて影ぞみだるゝ

〔校異〕なし

（三三三）

この歌は、

みさぶらひみかさと申せ宮木のこの下露はあめにまされり

（古今・東歌・一〇九一）

を本歌とする。本歌は宮城野の露は雨にもまさるほどしとどであ
るとするのに対し、例の歌は、その露よりもさらに多くの螢が乱
れ飛んでいるとする。

「諺解」に、露にもまさって影の乱れる原因を「木陰のくらき
をいへり。木下やミゆへ。螢の影もよく照し乱るゝ也。」とする
のに対し、「玉箒」は、「木下闇といふに。くらき故に螢の影の
ことによく見ゆる心も。少しはあるべけれど。」と一応認め、さ
らに、「宮城野の木下は。雨にもまさるほど露のしげくみだるゝ
所なるが。その露よりも猶とぶ螢の影のしげくみだるゝと。螢の

「諸草の茂りて。いづれが荻とも見えわかぬに風が荻の葉を吹て。外の草より。音の高きハ荻の有といふことをしらせんために吹過る也。荻ハ風をよくもちて。音の高き物なれば也。」と解している。

野への夕風が荻の存在を知らせて吹くといふところに有心化が行われている。

また、荻と風の素材結合は伝統化したものであるが、夏草の茂みにみえなくなった荻の存在を風が吹いて知らしめるとした発想は新しい。

猪無野夏

幽みじか夜のゐなのさゝ原明ぬれば影はありまの山のはの月

〔校異〕 さゝ、――しの（内閣本）、明ぬれば――明ぬれど（三六六）

（内閣本・承応本）

「猪無野」は、

ありま山ゐなの篠原風吹けばいでそよ人を忘れやはする

（大貳三位・後拾遺・恋二・七〇九）

の歌以来、歌枕となっている。幽の歌を詠ずる作者の脳裡には、大貳三位の歌が意識されていただろう。

猪無野のささ原の短い夏の夜があげると、まだ月影は残って、有馬山の空にあるという景である。

夏の夜は、古来

夏のよのふすかとすればほとゝぎすなく一こゑにあくるしのゝめ

（紀貫之・古今・夏・一五六）

と詠じられているように短いとされ、この発想が定着している。

しかし、幽のは、その伝統をふまえて、「みじか夜のゐなのさゝ原明ぬれば」とうたい、下句で、夜はあけたが月は有馬山の上の空にあるとして、夏の夜の気分を連続させているところに新味がある。

「みじか夜」の「夜」と「さゝ」は縁語関係、「影はありまの」は「影は有り」と「影は有馬」との掛詞となっている。

草間螢

幽秋ちかきこれやはたるのおもひ草葉末の露に影ぞみだるゝ

〔校異〕 秋ちかき――秋ふかき（内閣本）（三七五）

校異本文のうち、この歌は夏部のもので「秋ちかき」を採用する。

「諺解」の「秋近きゆへほどなく消ん事を螢の思乱れて。草の葉末の露と同じ様に影の乱るゝ也。」の理解に対して「玉箒」は、「今按。諺解に。秋ちかき故ほどなくきえん事を螢の思ひみだれてといへる。大に俗意也。」と酷評し、続いて「まず螢には火の有故に。人のうへになぞらへて思ひにもゆると常に讀也。さて今秋

ると批判している。が、宣長のように理屈っぽく考えなくとも、橋の花が風に散らされる夕暮時に、思い出すことは、遙かに遠き昔のことだとみてよいのではないか。

夕闇のたちこめてくる空や庭に、風に吹き散らされた花橋が舞うなかで、遠い昔に身も心もゆだねている景である。

池五月雨

〆五月雨のまさるみかさにはさそはれて庭になみよる池のうき草

(三三四)

〔校異〕なし

「諺解」では、この歌の本歌として、

わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ

(小町・古今・雑下・九三八)

をあげるが、「浮草」と「さそふ」が一致するだけで適切とはいえない。

「なみよる」に関しては、「浪のよると。いひて並びて一方へ寄儀也。」(諺解)との理解が妥当であろう。

幾日も五月雨が降り続いて、池の水嵩が増したので、とうとう池の浮草が庭にまでおし流されて、一方側に並んでいる景である。池の浮草を「さそはれて」と有心的にとらえ、水嵩が増すにつれ、どんだん庭の一方に押し寄せられてくる浮草の動きを生き生き点描している。

夏朝

〆夏草のしげるにつけて朝な朝な露さへふかく成にける哉

(三三四)

〔校異〕なし

「露さへふかく」とは、露がおびただしく置くことであるが、「ふかく」としたのは、夏草の繁茂との縁である。

一首は、夏草がしだいに茂ってくるにつれて、毎朝、そこに置く露までも深くなつたことだとうたう。

この歌には、毎朝、夏草の茂りゆくさまを見、そこにしとどに置く露をとらえてきた、ある時間の経過があるといえる。

夏の朝の野原に青く茂る草、そこに置く露、いかにもさわやかな世界をうたっている。

風前夏草

〆夏くさのしげみにわかぬ荻のはをしらせて過る野へのゆふ風

(三三七)

〔校異〕わかぬ—みえぬ(承応本)

夏草がひどく茂つたために、荻の葉がわからなくなっていたが、夕方の風が野辺を吹きわたって、荻の存在を知らせてくれるとうたう。

ここで気になるのは、夏草の茂みに風が吹くと、なぜ、荻の葉とわかるのかという点であるが、これに対して、「諺解」は、

〔校異〕こよひよどのゝ——こよひはよどの

(内閣本・松平本)

「よどの」(淀野)は「あやめ草」の生育している沼として、例えば、

寝やの上に根ざしとゞめよ菖蒲草尋ねてひくも同じよどのを

(大中臣輔弘・後拾遺・夏・二二二)

の歌のごとく、古来、夥しく詠ぜられてきた。この歌は、その名所歌枕を念頭におきながら、「よどの」に「淀野」と「夜殿」をかかせたところに修辭的技巧がある。

このあやめ草は、どこの沼より引いてきたかわからないが、今夜は夜殿(閨)の枕にゆいつけてねようという意になる。

菖蒲を枕に結びつけて寝ることの背景には、民俗学的にみて、邪気を払うといわれていたことがある。

夜盧橘

幽ねやちかく花たち花のにはふ夜は夢もうつゝもむかし成けり

〔校異〕なし

(三三〇)

「諺解」は、この歌の本歌として、

さつきまつ花たちはなのかをかげば昔の人の袖のかぞする

(よみ人知らず・古今・夏・一三九)

をあげているが、これは本歌というよりも、橘の香が昔のことを

想起させる歌の用例といえよう。

この歌で橘の香が匂っている所は、閨の近くだということ。そのことで、すでに、「夢」も「うつつ」も昔であるという世界が具象化されてくる。即ち、それは恋愛にかかわることであると。

花橘の香で昔のことを思いだす歌は、先の「古今集」の歌以来、伝統的な発想として定着した。その点、この歌もその発想をうけているが、さらに、寝て見る夢も昔の事を見、覚めれば現実にも昔が思われるとしたところに工夫がある。

幽おもひ出るむかしもとをし橘の花ちる風のゆふぐれの空

〔校異〕風——さと(承応本)

(三三一)

夜盧橘

「諺解」も「玉簪」も「花ちるさと」の本文に依拠して解釈している。「花ちる風」は確かに熟さない表現であるが、「草庵集」の古写本にもみえるので、一応、この本文で解釈してみる。

「諺解」は「橘の花のちる里にて。ことに夕ぐれの時分なれば。一入遠き昔を思出る也。此空は時をさして云也。」と解したのに対し、「玉簪」は、「今按。むかしも遠しといひて。遠きいはれなければ。頓阿にとりてはよくもとゝのはぬ歌也。もし花散里ノ巻のさまを。源氏ノ君の心になりて讀るか共見ゆれども。それにしても遠しの意たしかならず。歌よく見ん人猶考へてよ。」と、思い出すことが「とをし」とする理由がないので不安定な歌であ

とっている、せみのは衣の袖にかすかに匂ふのは、衣を着かえる瞬間の間に花衣の香が移っていたのであろうと推測している。

「花の香う、すし」としたのは、せみの羽の薄いのと縁になっている。

衣の袖に花の香が染みる発想の歌は多いが、この歌では、更衣をする、わずかの間に、袖から袖へ移った香をとらえ、それを「うすし」と表現したところに清新さがある。

暁時鳥

例いづかたときくだにわかす過にけりね覚の空の山ほとゝぎす

〔校異〕 きくだに——ききだに（承応本）

（二八七）

「きくだに」の「だに」は、ここでは「さへ」の意であろう。

また、「諺解」は、「ね覚の空」の「空」を「此うたにては時をいへり。ね覚の時分也。」とするが、いかがであろう。

夏の夜、ふと寝覚めると、空に一瞬、ほととぎすの声を聞いたが、どの方角であるかもわからぬうちに、飛び去っていったことを歎じている。

暁方にはほととぎすの鳴き声を聞いたと詠じた歌は多いが、この歌のように、寝覚め時のはっきりしない耳で聞いたので、どの方角でなかったか、また、その後の時鳥のゆくえがわからないと発想したのは珍らしい。

「いづかたときくだにわかす」には、せめてどの方向で鳴いたかを確かめたいのに、それさえもできないうちに飛び去っていった、くやしきの情が示されている。闇の闇の中で聴覚だけが鋭敏に働いている世界である。

早苗

例雨晴て夕日さすなり早苗とるたごのもすそやぬれてはすらん

〔校異〕 なし

（三一二）

「雨晴て」といっているので、田子たちは、その時まで雨の降る中で早苗をとっていたことになる。

夕暮になるにつれ、空も晴れて美しい夕日がさす。そこで田子たちは、雨と田水で濡れた裳裾をほそうとして居並んでいるのであろう。

ここは早苗を植えているのではなく、苗を採っている。泥くさい作業ではあるが、雨あがりのさわやかな空、西空を茜色に染めた夕日、雨に濡れた緑色の早苗などがイメージされ、美しい光景が点描され、さわやかな気分をかもしだしている。

菖蒲

例あやめ草引ける沼はしらねどもこよひよどの、枕にぞゆふ

（三一九）

るに着目し、雪ともみえないとしたところに新しさがある。落花を、せめて消えがたい雪とでもみていたいのに、それさえもかなわぬところに、花を惜しむ気持が背後に流れている。
なお、「つもれば」としたのは、「雪」の縁である。

池落花

仰散まゝに池の玉もはうづもれて花をぞわくる鳩のかよひぢ

〔校異〕玉もは——玉も、（承応本）
（二二二）

散った桜の花びらが、池の玉藻を埋めたために、鳩鳥がその花びらを分けて通路ができていいる景である。

この歌の前提としては、鳩鳥はいつもは玉藻を分けて通っていたことがある。

鳩鳥と玉藻は、

わがこひはますだのいけのにほどりのたまもにあそぶあとははかなし

（家隆・玉吟集・六六六）

の歌のように素材結合する。

白い花びらが池一面に散り敷いている中を、鳩鳥がこきざみに花びらをふるわせて泳いで行く。その後跡が一線の通路となって残っている。

鳩鳥の小さな動きにつれ、美しい花びらが左右に分けられてゆく景に清新さがある。

暮春鶯

鶯うぐひすのこゑをも風やさそふらん花ちるまゝにまれに成ゆく

〔校異〕なし
（二二四）

風は花だけでなく鶯の声までも誘っているのだろうか、花が風に散らされるにつけて、鶯の声もまれにしか聞かれなくなったことだと歎じている。

「諺解」は、この歌と近似する漢詩として、「何事春風容不得和鶯吹折数枝花」（王元之・春日雜興詩・詩人玉屑）をあげている。

風が花を吹き散らすことへの恨みは、古来、夥しくよまれてきたが、この歌のように、鶯の声までさそっているのかとした発想は稀であり、そこに意表をついた新しさがある。その背後には、花はともかく、せめて鶯だけはさそわないでほしいという気持がこめられている。

更衣

御ぬぎかふる程にや袖にうつりけん花の香うすしせみのは衣

〔校異〕なし
（二五三）

「ぬぎかふる程」とは、花衣からせみのは衣に更衣すること。「袖にうつりけん」の「けん」は過去推量なので、現在、身にま

河落花

④よしの河高ねのさくら散ぬらしこほらぬ水につもるしら雪

(一九六)

〔校異〕なし

一首の意は、吉野河が氷つてもいないのに、白雪が積っているのは、高根の桜が散つたらしいということ。

花を白雪にみたてては、あまりにも頻用された陳腐な比喻であるが、ここは「こほらぬ水に」と設定したところに新味をだしている。

眼前の景を見て、他の見えない現象を思いやる詠歌手法は、ふりつみし高ねのみ雪とけにけり清瀧川の水の白波

(西行・新古今・春上・二七)

と同じである。が、頓阿の歌には西行の歌のような力動感とはばしく、下句で知的発想に走っている。

夕落花

④いまは又花のかげともたのまれずくれなばなげの春風ぞふく

(二〇二)

〔校異〕また——ただ(承応本)、たのまれず——このまれず

(内閣本)

この歌は次の歌を本歌とする。

うりむるんのみこのもとに、花みに、きた山の邊にまかり

ける時によめる

いざけふは春の山邊にまじりなんくれなばなげの花の影かは

(素性法師・古今・春下・九五)

本歌取の手法は、本歌から「くれなばなげの」と「花のかげ」の表現をとりこみ、「いまは又」と時間的に進行させ、本歌の主旨をひきかえている。

即ち、本歌は夕暮になったら、美しい桜の花蔭をたよりとして宿ろうとするのに対し、④の歌は、いまは花の影も宿としてのまれない。夕暮になれば、春風に散らされて、花の蔭もないからとする。本歌の発想を引き変えたところに手柄がある。

落花

④消がての雪ともみえず桜花つもればはらふ庭のあらしに(二〇四)

〔校異〕なし

落花が庭に散り敷いたかと思うまもなく嵐がそれを吹きはらうので、消えがたい雪とさえみえないとうたう。

桜花を雪に比喻するのは、先述したように、ありふれたもので、けふこずはあすは雪とぞふりなまし消えずは有りとも花とみまじや

(業平・古今・春上・六三)

の歌もある。

④の歌は、庭に散り敷いた花びらが、嵐に吹きはらわれるとこ

燕は和歌の詠歌対象になることが少ないが、としをへてなれけん宮のつばくらめうしやみたえて後しく春などの歌がある。

(定家・拾遺愚草・三一―三三)

雲雀

④霞たつ空にはそれとみえわかでこゑのみあがる夕ひばりかな

〔校異〕なし

(一一二―一)

この歌の趣向の中心は「こゑのみあがる」にある。空に霞がたちこめているので、鳴きあがる雲雀の姿はみえないが、声だけが空高く上っているさまである。

視界には白い霞だけがたちこめているのに対し、聴覚には雲雀の鳴き声を聞いている。聴覚を通して雲雀の姿を幻視している。

雲雀が空へ飛び上がるのは、よく歌にうたわれてきたが、姿がみえず、声だけ上るとした例歌は多くない。

はるくと萩の焼原立つ雲雀霞のうちに声揚がるなり

(季経・六百番歌合・十七番左)

などは発想が類似している。

「諺解」には「夕ハひばりのよくあがる時分なればいへり。」とするが、

春深き野辺の霞の下風に吹かれて揚がる夕雲雀かな

など用例は多い。

(信定・六百番歌合・十七番右)

山路花

④わけきつる山はいくへとしられぬに花の香ふかく袖ぞなりゆく

〔校異〕なし

(一四七)

「諺解」の「分来つる山はいくへといふほどさしてふかくもおぼえぬに」の理解に対し、「玉簪」は、「今按。いくへといふ程さして深くも覚えぬにといへる。ひがごと也。是は分きたる所の山路の深くなり行事は。いくへといふ事を覚えざるに。袖にうつる花の香が深くなりゆくと云也」と批判している。

この歌は、袖の花の香が深くなったことからみて、夢中で山路を幾つも越えてきたことを知るところに趣向がある。その背後には、ひたすら花に心をうばわれて、山路を幾つ越えたかわからぬという、風流心を含ませている。

俊成の歌に、

おもかげにはなのすがたをさきだてゝいくへこえきぬみねのしら雲

(新勅撰・春上・五七)

という歌があるが、花にあこがれて、いくつも峰を越えたことでは、④の歌と共通する風流心がある。

の歌と雁字の比喻とをあわせて一首に仕立てている。

雁が水面の上を飛翔するとき、雁字の比喻から「水に数かく」としたところに趣向があり、雁が霞の中に消えてゆくにつれ、水面の雁字も消えてゆくとして、本歌の「はかなき」気分も同時に示している。

春月

④明やすき空ともみえず春の月かすみわたる影ぞのどけき

〔校異〕空——夜半（内閣本・承応本）（一〇九）

「空」と「夜半」は、どちらでも意は通じる。「諺解」や「玉簪」は「夜半」の本文を採用している。

「諺解」が「春の夜ハ明やすき物なれどもかすむゆへ。おそく明て。月もどかにゆるゆると明るやうに見ゆる也。此わたるは。空の霞をわけて行ありさま也。」とするのに対し、「玉簪」は「今按。歌の心は。春の夜は程もなく明やすき物なれば。それに應じて。月もいそぎて早くゆくべき事なるに。霞の中をわたりゆく月の。ゆるゆるとのどかなるさまを見れば。早く明クべき夜とはおもはれぬと也。霞を渡るとは。霞のうちをゆくにて。のどかなるけしきをいへる也。諺解に。かすむ故おそく明てといへる。大にひが事也。」と批判している。春の夜がすぐにあけるとは思われなかった原因として、「諺解」は空が霞んでいるからとみたのに対し、

「玉簪」は霞の中を月がゆっぐり渡ってゆくためとする。「玉簪」の理解が妥当であろう。

④の歌の新しさは、これまでの歌が春の夜の明けやすさを詠じてきたのに対し、それとは逆に発想したところにある。

「春の月かすみをわたる」と月を有心化しているところは印象的である。月光の「のどけき」を詠じたものには、

岩まよりながるゝ水ははやけれどうつれる月の影ぞのどけき

（後冷泉院御製・後拾遺・雜一・八四六）

の歌がある。

燕

④この春もふるすたづねて山がつの宿をわすれぬつばくらめ哉

〔校異〕わすれぬ——はなれぬ（承応本）（一一〇）

異文のうち、「この春も」からすると、「はなれぬ」より「わすれぬ」の方が妥当であろう。

一首は、この春にもまた、山がつの宿を忘れず、去年の古巣を尋ねてきた燕を点描している。

「この春も」の「も」に毎年の繰り返しであることが示されている。また、燕のようなものでも、卑しい山がつの「宿をわすれぬ」というところに、作者の燕に対する慈愛が歌の背後に流れている。

柳

(7)吹みだす風のあとよりやがて又こゝろととくる青柳のいと(八二)

〔校異〕なし

この歌は、一陣の風が吹きつけると、柳の枝はからみあって乱れるが、風がやむと、自然にもとの状態にかえるという、柳の糸のささやかな変化に目をとどめたものである。

風に吹かれて柳の糸が乱れあう状態は、古来、多くの歌人の詠じたところであるが、その後の現象にまで目をつけたものは少ない。そこにこの歌の新鮮さがある。

「とくる」は「糸」の縁語としてだされているが、「こゝろ」とくる「としたところに、青柳の糸を有心的にとらえている。

この歌でも柳という対象をじっと見つめ、風に乱れる動きから静止するまでの時間の長さがある。

(柳 風)

(8)影うつす岩垣ぶちの玉柳ふかく成ゆく春のいろかな(八四)

〔校異〕なし

「岩垣淵」は「めぐりに、岩の垣などのごとくに廻して有所の水のふかみ也」(諺解)と説明がある。「万葉集」には三例(二〇七

・二五〇九・二七〇〇)ある。

この歌は、岩垣淵の深い水面に影をうつしている玉柳の緑が、しだいに深くなるのを見て、春もまたたけてきたことだと感慨をもって詠じている。

「ふかく成ゆく」は、春の色と柳の色の両方をかけており、一方、岩垣淵の縁語ともなっている。また「春のいろ」といったのは、柳の色との連想によっている。

柳の緑の色濃きさまをみて春の深さを直接詠じた歌はあるが、(8)の歌のように、春のふかくなるのを、水面に映じた玉柳の色を通して、間接的にみてうたったのは少ない。水面を媒介にして春の色の程度をみてとったところに新味があるといえよう。

(海辺帰雁)

(9)こしの海のかすむ波まに帰るなり水に数かくかりの(九八)

〔校異〕こしの海——志賀の浦(内閣本・承応本・松平本)

「こしの海」と「志賀の浦」とでは、かなり大きな異文であり、単なる誤写ではなからう。北国へ帰ってゆく雁にすれば「こしの海」が妥当のようであるが、越の国へ帰る途中として「志賀の浦」とするの、あながち否定できない。

この歌は、行く水にかすかくよりもはかなきはおもはぬ人をおもふなりけり

(詠人しらず・古今・恋一・五二二)

遠近の梢が霞んでいる曙の時分に、どこからともなく、香ばしい梅の香がするという、さしたる趣向もないような歌である。

しかし、古来、梅香のすばらしさを詠じた歌は多いが、この歌のように、霞んだ中から、どこからともなく梅の香が馥郁とただよってくるという着想の歌は少ない。そこに新しさを感じる。

「をちこちの梢」と設定するとき、その梢の中には、梅の木もあることが暗示されており、「いづくともなく」といったのは、霞んでいいるからわからないということもあろうが、別の見方をすれば、あちこちの方向から匂ってくることも示唆しているのであろう。

霞・曙・梅香を配して、春の曙の艶なる雰囲気をかもしだしている。

なお「いづくともなく」と「をちこち」は対応している。

月前梅

(6) 槿の戸をささぐでぬるよの手枕に梅がゝながら月ぞうつれる (七一)

〔校異〕なし

「諺解」は本歌として、

きみやこむ我やゆかんのいさよひにまきのいたどもささぐねにけり

(よみ人しらず・古今・恋四・六九〇)

をあげ、「梅と月とを賞翫して、戸をささぐねたる手枕に、梅が

香もうつり、月も移る。春夜の景、言語道断成べし。」と解して

いるが、「玉箒」はこれに對して、「今按。梅と月とを賞翫して、戸をもささぐねたるといふ。大にたがへり。さやうにては何のめづらしげもなき事也。又君や来んの歌を本歌として出せるも誤也。

本歌にはあらず。歌の心は、梅が香をめでて。槿の戸もささぐねたる手枕に。梅がかは本よりうつれる所へ。その梅がかのまゝながら。又あらたに月もともにうつり来たる所をよめる也。ながらの詞に心をつくべし。」と批判している。「諺解」の指摘する本歌は妥当とは思えないし、槿の戸をささぐねたのも、「玉箒」のいうように、はじめは梅香をめでてのことであろう。

槿の戸をささぐねた歌には、

大空の月の光しあかければまきの板戸も秋はさぐれず

(源為善・後拾遺・秋上・二五二)

があり、袖の上に月光と梅香をうつしたものに、

梅の花にほひをうつす袖の上に軒もる月の影ぞあらそふ

(定家・新古今・春上・四四)

の歌がある。

「草庵集」には、同じ「月前梅」として次の歌がある。

梅が香はさだかに匂ふ木の間よりもみえず霞月かな (七〇〇)

(6) の歌は、槿の戸もささないで寝た行為に、梅香をめでる風流人の気持を出し、下句で手枕に梅香とともに月光を移して、春の夜の妖艶な世界をかもしだしている。

野残雪

(3) 春きても猶白雪のけぬが上にあまりてもゆる小野の浅茅生(二三)

〔校異〕なし

この一首は、春がやって来てはまだ消えないでいる白雪の上に、小野の浅茅がもえてでている景である。

本歌としては、

あさ地ふのを、しの原忍れどあまりてなどか人のこひしき

(源ひとし・後撰・恋一・五七八)

の歌が指摘できるが、(3)の歌は「あさ地ふのを」と「あまりて」の語句をとり、恋歌から四季の歌にかえている。

「あまりてもゆる」が、一首のかなめとなっており、「けぬ」と「もゆる」が縁語関係にある。

白い残雪をおしわけて、新鮮な緑の浅茅が芽をだした小野は、白と緑の色彩の対照も鮮かである。残雪のみえる季節のなかにも、春は確実におとずれていることをうたっている。

夕霞

(4) あともなくやがてぞかすむ夕日影入までみつる遠の山のは(四二)

〔校異〕なし

「あともなくやがてぞかすむ」ものは、「遠の山のは」である。

従って一首は、夕日影が山の端に隠れるまでは、さだかに見えて

いた山の端も、夕日が没してしまふと、あとかたもなく夕べの霞の中に見えなくなった景をうたっている。「あともなく」と「入までみつる」の歌の用例には、

あともなく、はる、時雨をいづくより又さそひくるあらしなるらん

(草庵集・六七六)

ひえのやまの念仏にのぼりて月をみてよめる

あまつかぜ雲吹はらふたかねにているまでみつる秋のよの月

(良暹法師・詞花集・秋・九八)

などがある。

霞の中を通して夕日影が山の端を照らしてしている。その美しい景を夕日が没するまでみていたが、その後の、霞んで見えなくなった景色にも心ひかれていた。そこに中世文学における美的理念でもある、遙かなるもの、朦朧たるものへの慕情がある。

また一首には、夕日が山の端に隠れるまで、見つめている時間の長さがあり、それにつれて刻一刻と変化する夕霞の中の景に見入っている姿勢がある。

梅

(5) をちこちの梢かすめる曙にいづくともなく梅が、ぞする(六六)

〔校異〕いづくともなく——いづくともなき(内閣本)

の歌を念頭に想起して、表現をとりこんできたのであろう。頓阿は西行に私淑していたので、この可能性は強い。

(1)の歌は逢坂での初春をうたうに際し、逢坂の関との連想で「氷の関」とし、春の来るのを擬人化し、関との縁で「こゆらん」としたところに、修辭技巧もほどこされているが、一首全体には、初春の到来の、さわやかさが盛りこまれている。春は東から来るとされていたので、京洛の東方の逢坂に着目し、清水の流れる音を聴覚でとらえ、春がそこまでやってきていることを想念の世界で感じたものである。

氷の関を設定し、それがしだいに解けて清水となって流れでて、春の到来を知らせると発想した点に新しさがある。

鶯為友

(2)竹をのみ友とおもひし我いほになれてぞきなく鶯の声(一九)
〔校異〕なし

竹を友とすることは、

晋騎兵參軍王子猷 裁稱君

唐太子賓客白楽天 愛為吾友

(和漢朗詠集)

の故事により、古来の文人がしばしば詠じてきた。

これまでは竹だけを友としてきたが、春がきて、我が庵の近くに鶯が来鳴きて、友となってくれる世界をうたう。

この歌で鶯を友とすることは、すでに歌題に拘束された発想であるが、他に、

山里はつれづれになく鶯のこゑよりほかに友なかりけり

(散木奇歌集・四九)^{注3}

吳竹をやどの籬にうへつればなく鶯も友となりけり

(拾玉集・四〇三)

はるのほどはわがすむいほのともに成てふるすないでそ谷の鶯

(山家集・三〇)

などの歌にもみえる。^{注4}

「竹をのみ友とおもひし」の「のみ」には、これまで竹以外に友とするものがないという、庵での孤独な生活が示されているが、やがて鶯の声を友とすることで、その孤独からのがれた気持が歌の背後に流れている。

なお、竹は鶯の来鳴く場所としてあり、先掲の「吳竹をやどの籬にうへつれば」の歌や、

よをこめて竹にさへづる鶯のこゑの色にや春のみどりは

(千五百番歌合・二番右・右大臣)^{注5}

など用例は多い。

「草庵集」秀歌評釈(上)

稲田利徳

頓阿の家集「草庵集」から、秀歌を抄出して評釈を行いたい。

「草庵集」は今日ではほとんど顧みられないが、南北朝期、室町時代、江戸時代を通して、二条派歌風を代表する歌集として、非常に広い階層の人々に享受されてきた。

それだけにいくつかの注釈書も刊行されているが、ここでは香川宣阿の「草庵集蒙求諺解」(正統二〇卷)(諺解と略称)と、それを批判した本居宣長の「草庵集玉箒」(正統一〇卷)(玉箒と略称)を参考にする。

「草庵集」の歌は、平易で解釈を必要としないと思えるものが多いが、仔細にみると、彼なりに伝統をおさえたうえで、さらに新味をだそうと苦心しているところがある。ここでは、その点にも着目して評釈してゆきたい。

また、「草庵集」の本文は、書陵部本(511-11)を底本にした「私家集大成中世Ⅲ」に依拠し、さらに、承応版本(承応本と略称)、島原松平文庫本(松平本と略称)、内閣文庫本(内閣本と略称)との本文校異も行いたい。本文には私意に濁点を施し、「私家集大成」の番号を歌の下に記す。

初春

(1) 相坂やし水ながるゝをとすなり氷の関を春やこゆらん(四)

〔校異〕なし

まず逢坂のあたりに清水の流れる音を配し、この現象のよってきたるところを、氷の関を春が越えたこと、即ち、氷が解けて流れることに求めている。

「諺解」は、この歌の本歌として、

にほどりの氷の関にとぢられて玉ものやどをかれやしぬ覧

(曾禰好忠・拾遺集・雑秋・二一四五)

を提示しているが、本歌と認定するのは躊躇される。むしろ、好忠のこの歌からは、「氷の関」という奇抜な比喻表現を借りてきたとみるべきであろう(因に「氷の関」は勅撰集全体でもこの一首のみ)。

また、「し水ながるゝ」も、

道の邊に清水流るゝ柳蔭しばしとてこそ立ちどまりつれ

(西行法師・新古今・夏・二六二)